

# 文学館だより

令和 3 年 5 月 1 日  
若山牧水記念文学館  
TEL 0982 - 68 - 9511  
文 責 日 高

新年度が始まり企画展のお知らせをした早々、日向市でクラスター発生。日向・東臼杵圏域は「感染急増圏域（赤圏域）」に指定され、市内の公共施設は閉館。文学館も企画展開催初日となるはずであった4月11日より閉館となりました。1年待っての開催だっただけに残念です。安全に開館できる日を待ち望むばかりです。

## 三浦家寄贈資料公開展 見ごたえ満載です

三浦家寄贈資料公開展 繁と敏夫 -受け継がれた二人の絆- より

そもそも三浦敏夫（みうらとしお）とは・・・

- ・明治25年生まれ、牧水より7歳年下
- ・愛媛県岩城島（いわぎじま）に生まれる
- ・牧水主宰「創作社」の社友であった
- ・大正2年、上京途中の牧水が敏夫を訪ねる。そこで、歌集『みなかみ』の清書を敏夫が手伝ったことをきっかけに次第に親交を深めていく
- ・その後、経済的にも牧水を支え、牧水没後は喜志子や若山家とも親交を深める
- ・亡くなる3年前に念願の牧水歌碑を自宅に建立  
自らを「島の歌碑守」と称し、牧水を敬愛し続け、生涯を閉じる



一番左が敏夫  
右から2番目が牧水  
大正10年5月撮影

### 第1期 プロローグ 敏夫の遺したもの 見どころ紹介

その1 せきららしゅう  
赤裸々集



牧水から送られてきた手紙を時系列に貼り合わせたもので三巻からなります。それぞれに筆字で「赤裸々集 巻一」「赤裸々集 巻二」「赤裸々集 巻三」と書かれてあり、これらは木箱に収められています（写真左）。手紙は全部で29通に及び、『若山牧水全集（増進会出版社）』に収録されていないものも確認され、見ごたえ十分です。

第1期では「巻一」「巻二」を展示しています。縮小版複製も作成しております。どうぞ手に取ってご覧ください。

展示資料「赤裸々集 巻二」より



（全集未収録）

三浦君、いったい君はどうしてある、存在不明の態あり、もう少ししっかりしろ、越前君がゆく、万事たのむ、寧ろこれを機会に君ハ一気清泉の血を注入せむことを望むの意あり、チト、酔ひすぎ、意をつくさず、御推量を乞ふ、四月にはあふ、  
二月四日  
三浦敏夫様  
牧水

## 求む！ 牧水顕彰会会員

私たちと一緒に牧水先生の足跡を後生に伝えていきませんか

日向若山牧水顕彰会は事務局を若山牧水記念文学館に置き、牧水先生の偉業・足跡をより多くの方々にお伝えすることを目的としています。本顕彰会は、昭和26年に結成され、70年という歳月を重ね、一度も途絶えることなく今に引き継がれています。

会の目的に賛同される方、会の事業を援助される方は、ご入会をお願いいたします。

【会費】正会員（個人） 年額 1口 1,000円（1口以上）  
賛助会員（法人） 年額 1口 10,000円（1口以上）

【特典】1 会員証を発行し、会報「みなかみ」をお届けします。  
2 若山牧水記念文学館への入館料が無料となります。  
3 関連行事の案内等、牧水顕彰情報を提供いたします。



その他、詳細につきましては若山牧水ホームページをご覧ください。文学館までお問い合わせください。

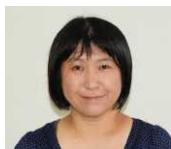
私たちと一緒に、牧水先生の足跡を後生に伝えていきませんか。

## 大口玲子さん、俵万智さん 受賞おめでとうございます

おおぐちりょうこ  
歌人 大口玲子さん

第48回 日本歌人クラブ賞

第7歌集『自由』



宮崎市在住  
第17回若山牧水賞受賞  
牧水・短歌甲子園審査員  
マスターズ短歌甲子園審査員  
青の國若山牧水短歌大会選者

たわら まち  
歌人 俵万智さん

第55回 遼空賞

第6歌集『未来のサイズ』



宮崎市在住  
第11回若山牧水賞受賞  
牧水・短歌甲子園審査員  
マスターズ短歌甲子園審査員

文学館に縁の深いお二人そろっての受賞、おめでとうございます。  
2冊の受賞歌集は文学館ラウンジにて手に取ってお読みいただけます。

## 牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介します

わがむすめ六つになれるが いたいたしな るにおびえて 瘦の見える

わがむすめ むつになれるが いたいたし ないにおびえて やせの見える

先月、熊本地震発生から5年が経過したとのニュースを見聞きしました。熊本城天守閣がよみがえったといううれしいニュースの反面、仮設住宅で過ごされている方がまだまだいらっしやると聞きました。文学館でも、『私たちは忘れません あの日のこと あの光景のことを』と題して、復興を願って寄せられた短歌を展示したことを思い出します。

そこで、牧水先生と地震といえば、『創作 10月号 大震大火記念号』。大正12年9月1日に起きた関東大震災をいち早く、克明に記しています。牧水先生、喜志子さん、黒木伝松さんほか数名の記録が収められています。小学校で書いた旅人さんの作文も掲載されています。被災した社友を思い、混乱の中現地に赴いた大悟法利雄さんの「震災地歴訪記」には、無事を確認したおひとりおひとりの名前が記されています。

牧水先生は歌集『黒松』に、余震雑詠として8首、地震（なる）の歌を詠んでいます。6歳の娘は、次女真木子（まきこ）さんで、余震におびえて不安な日々が続いている様子が想像できます。地震当日、牧水先生は伊豆西海岸に出かけており、翌2日、沼津の家族の元に帰っています。